

529  
41



始



529  
41





り  
し  
づ  
か



3

529-41

序

世捨人の歌も面白くないことはない。又た専門的に歌を作つて居る所謂歌人の歌も決してつまらないと思はない。併し忙しい世の中の實務に携はつて活動して居る人の歌には自らちがつた味がある。

此歌集の著者は國家の官吏である。魚の卵を研究して居る動物學者である。併し官吏であり學者である事は此人の歌人である事を妨げない。のみならず却つて此人の歌の境地に獨特な領域を與へて居る。

汲み上げた海水の數滴を顯微鏡で検査し、其中に浮游する生命の胚子の數をかぞへるといふやうな仕事其れ自身が既に詩であ

り歌である。しかも甚小さな卵の生命の不可思議な展開を追究する人の眼前には、常人の眼に見えない宇宙と自然の驚異と嘆美の世界が開かれなければならぬ。さういふ人の歌にはそれだけの反映がない譯はない。

此作者の職務は此人をさまざまの自然の境地に導く。離れ小島の實驗室に起き伏して晴雨計寒暖計の讀み取りをする時もある。漁船に乗つて陸地も見えぬ沖の唯中に一夜を明かす事もあるだらう。時には又深い山奥の湖畔に沈黙の幾日かを送る事もあるだらう。さうして其れは多くの歌よむ人のやうに、歌よむ爲や單なる遊樂の爲ではなくて眞剣な此人の仕事であり生活である。

かういふ「環境」と、多感な「心」とが接觸した時にそこに「歌」が生れ出

るのに不思議はない。さうして生れた其歌に「眞實」が含まれて居ない筈がない。

歌の詞や技巧は私には分らない。併し此一篇の歌集を讀んだ時に、私は此の作者の生活の一部を「體驗」する事が出来た。作者の閱歴や日常生活について殆んど何等の豫備知識を持たなかつた私は、此一篇を讀んで居る内に何といふ事なしに永い前から知り合つた友達の自叙傳を讀んで居るやうな氣がした。さういふものが本當の歌で有り得ないならば、歌といふものは私には何の交渉もない遊戯に過ぎない。

歌の表面にあらはれた處から見ると作者は一面に於て不幸な人のやうに見える。併し私はさう思はない。寧ろ最も幸福な人の一人であると思ふ。此れだけの「歌の世界」を有つて其中に活

きて行くといふ事は、矢張一つの天恵でないだらうか。

大正十二年八月三日

吉村冬彦

### 自序

そのおろかなる、そのみにくき心も、そのときどきの「われ」にとりては忘れ難く、また、いなみ難き「われ」なるをいかにすべき。とりあつめて、ここに一卷となしたるときこの「われ」に悔恨と愛惜との、また、あらたなるを感ず。

吾を知れる限りの人々に捧げて自らを葬るの墓標となす。

大正十二年八月十日

神谷尙志

目次

巻頭附録 故綿谷政二の歌

一、明治三十四年——明治四十四年	一
一、明治四十五年——大正二年	一四
一、大正三、四年	四七
一、大正五、六年	九三
一、大正七、八年	一三五
一、大正九年以後	一五一

表紙畫 ひとりしづか

装幀

勝見豊次

著者

卷頭附録

故綿谷政二の歌



家根の上におにたびらこは獨りさく乾ける

家根にただひとりさく(東京、明治四十三年)

晴れの大路美き衣つけて昂然と歩まん人に  
ならましものを(横濱、明治四十三年)

初夏は梧桐の葉の青き葉のたたなり合へる  
若きかげより(同上)

君も憂へし吾はも泣かじ生く限り吾等は遂  
に旅人ならん(加賀正太郎氏の渡歐を送りて二首)

名に負へど今日分れゆく近江路や青夏山の  
胸にしみぬる

12

なげやりの我この頃ははらたたし歌などよ  
まばいどとたえがたし(天津、大正三年)

我ゆくて生駒の山は雲こめて雄々し心をそ  
そるごと見ゆ(奈良、大正四年)

此土をば一遊星としも思ほへず巷馳けめぐ  
る市人わはれ(以下東京、大正四年)

群集のかたみにもまれもまれつつ足も地に  
着かずいづち行くらむ

水底にひそめる海の幸木の間草間にかくる  
る山の幸

身ぬち心ぬちなる眞實まことから求めてやまじまづし  
き我は

天地にみちにみちぬるまなたからいざやめ  
さめて求めむ我等は

3

釋迦も耶蘇もドンキホーテの一種かと思ひし時のはかなき心

キリストは醒めず了りしドンキホーテ、ドンキホーテはさめしキリスト

死すと云ふ得疑らぬ事なくば我が生くこともはかなからまし

明治三十四年

明治四十四年

母上の水汲み給ふ曉に二つら三つら渡るか  
りがね

\*  
脚もとに蚊遣の煙みなぎらせ雲にのりしと  
弟はいふ

\*  
立ちのぼる野火の煙の絶え間よりうるしも  
みちの色のよきかな

\*  
両側は清き流れよ水車廻るほとりに鳳仙花  
咲く

雨晴れて夕雲の色あかあかと蟲の舞ひよる  
夕顔の花 4

\*  
定めなき想の胸に湧く如く海のあなたに夏の雲行く

\*  
友と二人朝の列車の片隅に出水のあとを語る寂しさ

\*  
友の歩み吾の歩みと相合ふて赤砂道の松原を行く

掛稻の日向に香ふ田甫道水おほばこの花の影浮く

\*  
桃太郎を歌へばつれて妹の踊る身振や病怠る

病める友病み臥す吾を尋ね來て逝きにし友を語る悲しさ

夢なりき歸らぬ友の微笑なりき曉近き五月雨の夜半

頬撫せば頬こけ腕摩せば皮たるみ夕さびし  
く病を思ふ

6

しみじみと蚊遣の煙かほりきぬ母の題目を  
ききつつ眠る

吾獨り大いなる蚊帳に入り居て夕涼みする  
人の聲きく

訪れも便りも絶えて今日三日寂しき夕蚊遣  
火をかぐ

なつかしき壯健の國離れ來て病の國を吾は  
さすらふ

一つ一つ梧桐の花こぼれ咲く憂ひの空に午  
砲とどろく

\*

取りとめもなき白痴事を言ひつゝのり髪もお  
どろに檻たたく人

\*

うそ寒の秋の夜風を片町のおどけ芝居を見  
つつある吾

7

いつもよく電車に睡る人の如空<sup>くう</sup>虚心<sup>こころ</sup>になら  
ましものを

8

停車場の金網張りの手あぶりに冷たき人の  
手と手とまじる

\*

この流れ彼の山<sup>やま</sup>幼<sup>ち</sup>さき吾と云ふ幼<sup>ち</sup>さきわれ  
の母よ乳人よ

\*

心もち北に傾く木蓮の一つ一つの春を寂し  
む

山にして春にしてきく鶯のしきりに戀し人  
のなつかし

\*

我口と心とそはず君と見し夕もだせる青き  
海見る

\*

人と云ふ人芳烈の炎にもえて眼もあやなく  
に春の街ゆく

\*

山の上に白き雲湧き山の根に白壁の家とび  
とびに建つ

9

山の根の所々に雲迷ふ淺間が裾の雨を旅ゆ  
く

10

\*

紫陽花の青く爛れし花瓣のにじみ心を細き  
雨降る

人と物言ふことのおぞましくいつか獨りの  
吾にさすらふ

このままに筆と紙とのある限り吾に泣かし  
め吾に書かしめ

掌のすべいすだけの天地を秋の細蚊は囚は  
れて鳴く

此の心死んでもなごとなよ君よ情なきこと  
をのたもふものかな

喜びかあらず悲哀かなにすれば君と見ると  
き涙さしぐむ

何物か手より足より頭より發ち去りてゆく  
抜け出て行く

11



秋草を摘みつゝあればとめぎなく心の底の  
むづがゆくなる

12

濠端の雨を電車の窓に見し葉見す花見す痛  
ましきかな

\*

猫板に猫の睡れり埋火のややに冷めゆくも  
ののなつかし

\*

晝間近醫師の椽に蹲まるはへの羽色にさら  
ら死の影

きれぎれの心の端のなにすればかなしき事  
を思ひ續くる

明治四十五年(大正元年)

大正二年

厄年ぞ厄避けの祖師へ詣でよと母の仰せの  
いなみ難かる

\*  
あかあかと水平線に入る曉の月は泣くべき  
色にこそあれ

\*  
その頬の赤きが君のいたつきと知らずや君  
の頬の熱さよ

\*  
はね釣瓶はねられたるがままにして風とあ  
そぶが心にくけれ

島蔭に春泥集を讀み居しが側へのぐみに眼  
白來てなく

18

紅の椿の花のぼとと散りぬ追憶の香のゆら  
ゆらと散る

南より雲の廣ごり沖をゆく風の黒きに白鷗  
とぶ

この島に吾の住むことわりなけれこの木こ  
の鳥この土になく

灰に文字書きなごあればちりちりと寂しさ  
を湯の沸ざり續くる

横の垣あんす咲く家鶯のよく啼くこの家琴  
のなる家

富士も見ゆ天城も見ゆる日となれば心空ゆ  
き君に走れる

この花に南の春を知れよとぞやさしげのこ  
とかなしげのこと

19

その果てに一つ白帆の浮ぶこと眼などにす  
こし滴すること

「猫」を讀みて獨りおかしくなること  
のなにとて今宵かくは身にしむ

傍らに火のあることと晴れやかに湯の沸ぎ  
つことうれしなつかし

かの崎みさきまた紫に匂ふかな春の雨降るひと時  
の前

鐵瓶も唄はずなりぬこの島に眼醒むるもの  
の一人となる

日はいりぬ一點赤き雲残る駿豆にこむる黛  
の色

笠雲は富士の上に居り深藍の潮はさかまさ  
心とまぬ

君見ませ今宵かの月三日の月蒼あをやかに入る  
悲しからずや

破れ釜に挿し木のままに生ひ出ててぢえれ  
にあむ咲く春日となりぬ

\*

たまたまに會ふ日は分けてまれなるを君ま  
たしても臥せり給へる

男とは泣かぬものぞといふことを忘れてい  
つか涙くみぬる

歳々に吾といふものが少しづつとけてあり  
けり悲しからずや

淺ましき己が心のうらおもて淋しくふれて  
涙ぐまるる

\*

何處で見し女かふつと眼に浮びふつと消え  
ゆくものたらぬかな

\*

船形に茂八どよべる壽司やあり青くふくれ  
し女ありけり

\*

島よ島よ青く臥したる汝がかけ眼に見えく  
れば涙さしぐむ

道すがら草の葉などを噛むことのくせさへ  
いつかさびしきものぞ

24

なにの樹の花の香るかあまたるく森をゆく  
ときしみじみ匂ふ

\*

十日前に一所に酒をくみし人さめに食はれ  
しといふはかなきことかな(遠藤、石切山を憶ふ二首)

一握の金平糖の温味さへ今は甲斐なし涙を  
誘ふ

自分が死んだ時泣いてくれる人を数へて見  
るさびしい心

\*

うづくまり座れば砂にほとぼりの濕ひてあ  
り月の出をまつ

あの女ひとの頬のほくろといふことが今日一日  
の思ひ出となる

思ふことあとからみんな崩れゆく空とぶ雲  
の脚のはやさよ

25

訓練を経ざる面かなまごろすといふ群のき  
て島めぐりする

26

常人と少ししたがへば氣狂とよぶことをもて  
心なぐさむ

この朝鯛をよぶ手の指と指觸るるひまより  
もるる秋風

はや富士は雪のかむりを輕らにもかむるこ  
の日を秋が身にしむ

魚一つ躍るが外になにももの動くものなし  
秋の夕暮

この日頃夜ひるひびきぬ海鳴りは胸に空洞  
のつぶやくに似て

何處やらにいとどなくめりほんのりと空の  
明きは月のいでしか

大房を一番船も廻りたりとびが舞ひもふひ  
るにもやなりなん

27



この心天知る地知る吾知るが外に君知る樂  
しからずや(以下大正二年)

\*

この朝椿の花のおつといふおつといふ日を  
ひねもすねむる

粉薬を飲む手ふとやむ松が枝の片割れ月に  
心ひかれて

ふくろふの啼く時吾の思ふとき空に光かなし  
地に響かなし

仰向けに手をば軽らに胸に組みかくて死な  
んと思ひけるかな

時にふと赤き衣など着て見んと思ふ心の何  
とすべけん

\*

死ぬまでは語るまじきをにくや君君の片頬  
のにくやその笑

\*

今朝ぞ梅雨後架の隅に見出てたる蜘蛛のも  
ぬけの殻をしぞ思ふ

そと君に参らせんとて折りてこしこのべる  
しやの菊にもものいふ

30

めいめいが持つといふなる心こそにくきも  
のなれ秋の風ふく

\*

只一つ我もつ奇しき玉手箱あけて狂ほし開  
けで狂ほし

\*

暗けれど暗きにあらず明かけれど明きにあ  
らず夜はさまよふ

薄白き日の射しきたりうす黒き松の梢のう  
つるかあてん

さやかなるさあちらいとを脊に負ひてこの  
いざよひの島を漕ぎいづ

稍すこし月に暈かきあり大地ゆく風のしのびね  
蟲のしのび音

夜は九時といふに鳥のなくきこゆ耳のまご  
ひか鳥の狂ひか

31

あつけなさを物さく音し風ならしとびの様に  
も消ゆる飛行機

おきなたち眼をしばたたき長いきはすべき  
ものよといひつぎにける

\*  
あかざの實指のあはひにこき行けばざらざ  
らと秋秋がこぼるる

快よく世と絶ちてある如くにも覺ゆる日な  
りひたすらこもる

手あぐれば一度に蟹が岩にいる面白いかな  
かくて半にち

様々にくれめぐりたる空の色雲の色かな海  
の色かな

入船か出船か二つ汽笛鳴る心すばやく君に  
むすぼる

\*  
この山路わが一生の足跡の二度とつかめや  
思へばさびし

あの女の頬にほくろがふゆといふかく思ひ  
つつ鏡に向ふ

34

思はずてありなんとさへ時にふと心にそむ  
き獨りごと言ふ

\*

獨逸語と英語の辭書を枕してまろびねによ  
むくせもわびしや

机のかげちりちりとしのびかに蟲鳴き  
いでぬ心いきつぐ

入口の廂の梁に二羽がほど夜毎雀の宿るこ  
の頃

出過ぎたるらんぷのしんをちぢめつつ思ふ  
ことはなほ君につながる

灯のかげの黄いろきだりや夜となればすこ  
しつぼみて何か思へる

いちけたる秋のだりやの花瓣を蟲のはみ居  
りそのままにささん

35

つれづれの口にして見しわびしさよ木陰の  
あけびあまさうすかり

36

ひたぶるに三日ばかりのいそしみの後のさ  
びしさは何にたとへん

東京の空の明るさ船形の灯の七つ八つ水に  
流るる

ちさきとき鳩とよびにき草色のうんかの秋  
となりにけるかな

十月の上の八日の雨降りを毛布にまろびう  
つつねぞする

\*  
繰り返し思ふことただ一つひとつをめぐり  
めぐるばかりぞ

陸路にはつくつくし未だなきてあり島には  
いつかなかでありしを

\*  
母が姉を失ひしこと秋風の便りの内にきけ  
るかなしさ

37

一人の姉と頼みき一人の妹と戀ひきさびし  
からまし

38

かのをきを永の別れといひしことひとせ  
をへでまこととなりぬ

氣強しさ筆に涙のしぬび音のしのびなかす  
る母をしぞおもふ

いまだ見ぬ母の故郷未だ見ぬ叔母の一人を  
なごゆかせけん

年々に母に負はする淋しさのまた淋しさを  
つれてきにける

ともすれば心うろつくひまひまを母の涙の  
しみて流るる

腑甲斐なきこのふやけたる兒ゆるぞもさら  
でものこを母になかする

\*

ふと笑ふおのが聲音の力なさ物のはすみに  
さびしかりける

39

「永久の試み……」とかきあとの句の詠みいで  
す間に一日へにける

40

北條の齒科醫の二階すがたみにみすばらし  
くものびしあたまよ

心今朝銀の様にもきらめかし花壇に花を切  
りてありけり

\*

日毎日毎魚の卵の發生に命かがりて秋もお  
ゆらし

十あまりこつぶをならべおごそかに顯微鏡  
よりのぞく秋の日

\*

自らに小水を焼く鋭さを心は持ちて秋やや  
深し

\*

しやちかみと人等いふなり海蛇のまだらの  
肌の秋の日の色

うみへびのあくありうむに鎌首をもたげて  
は細き舌を出しぬ

41

この濱とかの濱に鴉なきむれて秋の入日の  
一時をほぐ

42

棒片を銃によそへて秋の濱鴉の群を追ひて  
遊べる

幾千羽沖の小島の落日に鴉なくなり鴉舞ふ  
なり

爪切りぬ花とむかへば蟲なきぬ港に船の時  
の鐘鳴る

秋もはや末といふ日を縞の蚊の耳元にきて  
なにかささやく

負債おほひののはても終らで秋のくれ長き病に入り  
にけるかな

夜となれば物思はなくにほろほろと涙流る  
る眼もやめるにか

かり草のかほり身にしめ長々と寝ながらに  
して秋の海見る

43



青さよな六日の月の青さよな足らはぬ戀の  
冷ゆるここに

蛋白とよべるまがもの身ぬちより出づる病  
に今日もねにゆく

寢ながらに母の手紙を読むことの勿體なさ  
をしみじみ思ふ

お大事にさ少しはにかみ藥局の女がたてし  
ちさき硝子戸

いつか吾よりくせとなるその柱たれもよら  
ざりいみじくうれし

\*

ほのぼのと夜や明ぬらし我母がくりやに刻  
むまないたの音

大  
正  
四  
年

大  
正  
三  
年

ひとりとして若き女のあらぬとき電車は痛し  
小手の冷たし

そのやうにかくの如くに働きて考へ事は捨  
てんと思へど

\*

我好きは白きいろごりかぐはしきこのふり  
いちやと君も知ること

そのやうにたやすく吾の心をば傾けつくす  
吾と見ゆるや

人目には易き心と見ゆること許すべからず  
許すべからず

50

丸顔がよきや面長を好きてかどざれごとを  
のみ君やめたまへ

\*  
二十里を都の外に訪ねきて君と語ればふけ  
を知らなく

あのわたり小田原の灯ぞあの光いかつる船  
ぞ暗き沖かな

また今日の始まるひびき寝ながらに見知ら  
ぬ里の鐘の音をきく

\*  
きちがひと母とのちさきいさかひなども耳  
ごまり夕暮れのいきぐるし

寝ながらに水薬をのむはしたなき業になづ  
みて三月に入る

我母が薪割る音も力なきうすき心はおびえ  
んとする

51:

一皿の魚一椀のかゆにさへ心はさまさまに  
おもむくものを

\*

我眼鏡二つ硝子にうつりたる外の面は暗ら  
し西の風ふく

我窓の一つの燈火あかあかと孤ひびつ小島の暗  
にもえもゆ

\*

こころよく君と語りて分れける夢のさめ際  
白し真白し

なけなけ蛙聲をそろへてみんななけなけば  
さびしさとびもちらんか

\*

からからと傘屋のかごのからかさかに風鳴り  
いでて春日は白し

\*

このなやみとれなば胸のすつきりと晴れん  
と思ひ君をし思ふ

眼さむればばつと硝子に月が射しふかぶか  
と夜はふけてありけり

ふともなく見入れば蟲のひたぶるに絲にすがりて上るなりけり(葉卷蟲十一首)

己が身の丈百丈に餘りたる細き糸より蟲昇りゆく

細き糸を口にくはへて脚にかけ脚にかけつ  
つ蟲上りゆく

葉卷蟲汝のかそき影は今地におちたり地におちたり

蟲よ汝と吾と若葉の蔭にあり日は前十時高  
高と照る

右にゆれ左にゆれて上りゆく蟲に風あり命ありけり

ふうわりと糸に下りてもてあそぶ葉卷蟲が  
ほどの命を思ふ

そとふけば恐れをなして尺あまり三尺あまり一尋の地に至りて死ぬまねをする

あら尊とえにし糸の切るるとき地を匍ふ力  
蟲は地を匍ふ

56

そと觸るれば死にまねをするはしたなき蟲  
の業にも涙流るる

蟲に死をまねしめて思ふこと蟲の命にかか  
はりもなし

\*

陸くがになく蛙の聲のはろばるときこゆる夜な  
り月に暈かまあり

いつの頃よりか心はましぐらに思ふこと皆  
君につながらる

今日はこれでよしと思ひて引きよする心は  
枕の上に漂ふ

子に便る親の弱さを命にて我今渡る橋は丸  
橋

なにもものにか握られて居る苦しさが淋しさ  
が今日ものぞきゆきけり

57

科學は要するに説明にすぎじ入日は赤し血  
の如く赤し

\*

島もよし崎もまたよし寝ながらに我見る海  
に浮ぶみなよし

\*

汝あまり皇帝臭くなる勿れとあうれりやす  
の尊きことかな

天のものは天に返せ地のものは地に返せか  
く云ひて死なんとぞ思ふ

弟が子を産みしとふ秋風の便りにきけばそ  
れもいたまし

\*

この心君持つところこの心吾も持つべし樂  
しきことかな

\*

なんとしたことかや今朝はねくたいを棚に  
忘れて我歩みをり

\*

考へて居ることがみんな偽の様に大偽の様  
に海は美しい



君よりも先きにゆかんはいと苦し君よりあ  
とにのこらんもうし 60

獨りごといいひて見たれど傍らに誰もあらざ  
り眼をつぶり見る

父母の尊さなごがやうやうに分りて今年秋  
もくれゆく

\*  
はしきやし君がゆくてに光りあれ光りあれ  
とぞ日に向ひ呼ぶ(綿谷に饒く)

夜の三時世界の人の今すなる事はと思ひし  
ばしまたたく

\*  
寒ければこつぷの魚卵ういを火のそばに置きて  
そだてぬはや解れかし

\*  
ばろめたあ昇るとしては北の吹き降るとし  
ては西の吹きげに房州は風の名所

南峰みなみは少しく雪の斑らして富士の晴るる日  
安房に西吹く

なにといふ美しき空かな美しき空かなひと  
りいばりをぞする

62

\*  
祖母が乗る人力車とはせて勝ちたりし我十  
三のふとも浮べる

\*  
ややすこしかけたる月の大き暈ねぼけ鳥の  
なくよ小島に

うそぶくに似たる口かなうみたなご我皿に  
のり二つうそぶく

夜毎夜毎らんぶの心のかたごもり悲しむが  
ごどたのしむがごと

まがつとり鴉啼く啼く夜をこめて樹をめぐ  
りなくとまる枝なきか

かの友と分れて四年この頃は秋のむかごの  
もだしこぼるる

\*  
うぬぼれて見れど吾はよき息子かや人が見  
たればなにといふらん

63

吾こそは意氣地なし男とさげすみてあるに  
なれたるはやもいくとせ

64

吾はしもいくちなし男よ弟の家持ち兒をば  
うめりと云ふに

貧しきを看板として幾年ぞあまりに厚き皮  
を吾よ着な

\*

なにかつと飲みて見たかり一杯のここあを  
飲みしに心まぎれぬ

おぞましや戀の一つもならず間にくれて廿  
七あけて廿八

伊豆駿河相模は雪よ旅心眼にしみじみと山  
の光り來

もちつきは男のすなることとのみ知れば女  
のここはもちつき(安房北條所見)

\*

母と二人大つごもりの夜を寒み炬燵にあた  
り細々かたる(以上大正三年)

65

とそくめば雑煮を祝げばあなあやし生くこ  
と吾によみがへりくる

66

知らずに居れば時計とまれりあわてて時計  
をまくにさていくじやらん

吹きしぶく波の頭は七色の綾羅をのべて西  
吹きしぶく

ぱつと照りぱつとかげりて我心白き雲ゆく  
黒き雲ゆく

尋あまり母への手紙かき終へて冬の夜さり  
をむくみかんかな

自らの焼くる臭ひよ落髪は火に下るとき音  
たてて泣く

この涙なのに涙ぞ朝にして我床にしてなく  
は誰がこと

いさなとり寄れば魚のはなしをぞするつま  
らぬこと心ひかるる

67

少しづつかきを碎きて與ふるにゑさにより  
くるはしきえびかも(アメリカン、ロプスター一首)

\*  
また今日の吾の命の死にゆくをぢつとはご  
くみ枕引きよす

君と寝しかの夜我見し夢に見しくしきとび  
もの忘らへぬかも

ひとつとして指ののぞかぬ足袋ぞなきうら  
ぶれ心ぬふによしなや

われ廿八男と生れ冬の日を磯に貝拾ひうつ  
つともなし

白きもの君がかんばせ君が小手君がかんざ  
しあやきぬのもん

\*  
あの雲にならばや山の上に居て動くともな  
く浮びてましを

夜の底のかなしみかもよなにやらん濱にや  
く火のたえてはつづく

その底の底よりゆる響ともききのさびし  
く海の遠鳴る

70

\*  
やがてやがて競ひひらかなん手力を握りし  
めつつ羊齒は地を裂く(羊齒を詠じて綿谷に饒く十首)

もろで皆地をぬきいでて大空は青の雲間は  
春日ながるる

地を裂く羊齒の喜び大空は母の涙を父のひ  
かりを

喜びは天に捧ぐと向き向きに羊齒の巻葉は  
ひらきそめぬる

見よ見よ地の不可思議皆人の蹴捨てにすな  
るこの地この草

羊齒の葉の若きうなだれさらば地よさらば  
我母吾をまもりてよ

森のかげ樹下の暗にもえ出でて羊齒の若葉  
になにの清さぞ

71

羊齒の葉の叫ぶらく地よ感謝すやがて祈ら  
く天よ感謝す

72

その力地のものぞこの力天のものぞ吾れに  
みちみつ

よろこびはこれに過ぎめやかなしみはこれ  
に過ぎめや天地に生く

\*

朝毎に戸口の石に三つ五つ糞こぼしゆくわ  
ざは野ねすみ

野ねすみが椿の花を吸ふことも不思議の果  
ぞ面白きかな

ちちちちとせきれいがぬうてとぶはまべを  
いはをちちちちととぶ

夫はかり妻は漕ぎつつ新若芽ひろひもてゆ  
く島の浦まを

きららきらら千重のさざなみ日の光りいた  
も眼にしみくらめきふすも

73

八十あまり五とせおうな今朝もはや磯につ  
くばひ潮まちすらし(さんかねの海女十二首) 74

あがむこのおけよと云へどしかすがにやめ  
らへずして潜かづがなと云ふ

さんかねのばばとこそよべすもどりのうし  
ろすがたにまた火してあり

まはだかのばばがたりちちたばたばにふる  
へ居るかもしわへたるかも

たばたばにたりししむら衰への果てをつ  
やつやひかりたるかも

眼ぬちやや赤くただれておすげにもあけて  
ものいふさんかねあはれ

ころころに焚火の下にいも一つまろび出せ  
ばばばの喰ひつ

まへたれの前の垂り端をおしろへとはさみ  
てほのかくりたるかも



樽一つ網袋一つめがね一つうすき衣きてお  
りたつ海女は

76

ぼたぼたに潮たりつつ磯歸るおうなよあは  
れてんぐさすこし

雨の降れば潮のわろしと云ひにつつ腰を  
火あぶりそだそへにけり

あはれおうなこのくもりぞらはやてぐも南  
よりとぶにはやかへりませ

今なきしことはと思ひ頬に垂る涙のごへば  
冷たかりける

水底に波のかげゆれ小魚ども居群れてあれ  
ばひるにもなりぬ

つくづくと針も掌内に泣きぬべし君もなく  
べし針よいで來よ(あるひと掌に針ささりたりと云ふに)

見よ秋の樹々にも木の芽吹くものを汝よ心  
よなににはばむや

77

性は皆汝がまにまの身にはそへ「美しき空」も  
汝が胸内ぞ（妹に「美しき空」二巻を贈る）

78

\*

大空に雲ゆく極み海原に波立つ極み消えめ  
やかなしみ（中野青子氏母堂の死をいたむ）

南無大慈大悲女菩薩觀世音秋は必ず吾に死  
なしめ

ひららひららひんらひらひらひらひらひら波  
のさあをに鷗とびとぶ

貫之の墓をさぐりて詠める句もいつか忘れ  
て寒さを覺ゆ

\*

この浦はをみなおそろしえをとこのひとり  
ゆかんはあやうしと云ふ（平沙浦を詠す十首）

ぽつぽつの大山小山砂山の眼もはろやかに  
續きたるかも

人の足跡犬の足跡牛の跡我等がゆくへ續き  
たるかも

79

砂丘ははひもとほる草蔓の草のかれがれは  
ひもとほろふ

されかうべ牛の頭のぼくぼくと乾ける音す  
たたけば音す

しらじらにしらけほほけてちりばへる牛の  
むくろにはだら日射すも

つやつやに光りがよひ散りばへる貝もさ  
びしや骨にかもにる

この濱に生きとし生けるかにの子よかには  
かにとし思ふ子を得ん

ころころにあしの小枝のころころに砂の斜  
面をまろびやまなく

もそろもそろ砂を崩すにきりぎしの砂は流  
れてらうあゝの如しも

\*

旅に出づ旅に出づとて我踏めば朝の市路に  
うすくもや立つ(旅の歌三十五首)

眼をみはるここのあれかし心より驚くこと  
のあれなんぞ祈る

82

ながながと朝の光りに樹の影は地に香へり  
地ぞ香へり

與吾と云ふ停車場にさく黄なる菊眼もはれ  
やかに流れたるかな

たらちねの母がふところ生れし國信濃の山  
は暖きかな

越の國名<sup>な</sup>立<sup>だち</sup>の村の家根に置くまろき石とも  
果てましものを

ややおうけにそうきああきそうちやけに母  
が生國なつかしきかな

まがつとり鳥がなければ百舌鳥がなく人もな  
くなくおろがみ奉る

ぬかづけばまがつ鴉のすぐろごり蠟を喰む  
とししばなきしきる

83

兼六も一本とちの黄葉にしくものあらめあ  
はれひともと

84

なにと云ふ山か山の名知らねどもその山ひ  
だに心ひかれぬ

名しらぬ山山のあはひにいゆく雲低く亂れ  
て夕暮となる

我やごる今宵近江の湖のほとり雨しとど降  
り友よく語る

分れ居て四年が秋にめぐり會ふ友の手ぐせ  
もなにかさびしき

きりきりと口を結びて手をば摩る友がくせ  
やまず止むときあらめ

三年ほど見ざる弟の丈のびて吾に越えたる  
もおどろかれぬ

道に相見ては袖ふり過ぎりなん變りたがへ  
るそのおもわさへ

85

相見れど心になにの影もなし弟なれどせん  
方もなし

83

兄といふ心おごりの淋しくも三言二言さび  
しあなさびし

遠にきく小學校の奉祝歌いまぞすめらぎた  
たす御位

霧ぞ立つ霧ぞ流るる曉は向つ峰<sup>マ</sup>の邊にかが  
よひわたる

宇治桂木津の川邊にたつ霧は流れ流れて淀  
にかもおつ

君が吐く我吐く息も流れゆく霧と交らひと  
びてやまなく

何物の比うべしやは流れゆくさびゆく霧の  
尊きかもよ

狐川渡しの名にも旅めきて心ゆらゆら淀の  
瀬を越ゆ

山崎の水明莊の塔の家根あけに輝き朝の霧  
晴る

88

男山男にあれど息なづむ山は神々しく生ひ  
にたるかも

欄に倚り走り書きする旅の文旅のほぎごと  
旅のうまごと

桃山の御陵の前の御手洗の長柄の柄杓忘れ  
かねつも

東大寺大鐘樓の軒の張りおそろしきものを  
見たるものかな

えいとひきえいと放せばがうと鳴る大鐘樓  
の秋の日のくれ

あめりかの若きせいらが一つつく二つつく  
つく笑みてけるかな

我行けばぎいとひらきてぎいと閉づ大佛殿  
の大きな山門

89

お寒くはあらしやと云ひ搔き合す君がうな  
ちゆ分れけるかな 90

もて参るだりあの花の悲しみを佛にいます  
君に見んとは(中野氏母堂の七七忌に)

\*

枯れ枯れの尾花が末のもそろもそろ風に散  
りぼひ行方知らずも

心またこの秋風にすがれつついよいよ細り  
涙さへなし

おしきつて我言ふことこのまことをば君がこ  
の日はなむけにせむ(中野青子氏十二月婚嫁せらる)

\*

あなかしこうからはらから友が文やかんと  
すれば涙流るる(文殻を焼く五首)

文二千落葉に交り音もなく燃えてし行けば  
心をろがむ

大空のさあをに吸はれゆくがにも文殻火と  
散り灰と舞ひゆく



残り火のほてりにさへもしみじみと文殻の  
ぬくみかへしてもみつ

92

手にとればもそろと崩れかなしくも指の間  
に残る灰かも

※:

冬は寂し女のまげの入れ毛などあらく見す  
きて電車はこむも

だれもかれも貧しき面かな日の本のやまと  
国民貧しき面かな

大正五年

大正六年

遠にきく犬の鳴き聲その犬の鳴きまねをする男をしぞ思ふ

犬なけば犬のまねをし鳥なけば鳥のまねをし一日をあらな

\*

右廻り籠の鯛はくるくると廻りてやますめぐりてやます(籠の鯛三首)

きらきらと頬をふくらせ鯛の仔こませにより来いむれてより来

ひとさぢの餌にいわしの右廻りはらりとと  
けて頬をはりよる

\*

ぼつかりと一樹は高しきりぎしの海のまふ  
ちに椿赤しも

緑なす心の葉がひそが葉がひ君は咲きたり  
我心鳴る

\*

冬なれば花咲くまじと思へども思ひしなへ  
て枯野をめぐる(あるひとのために撫子をたづねて四首)

かれがれの冬野の底に見出てけるなでしこ  
あはれ花なしあはれ

砂丘の小草が蔭に細々と枯葉まじらひなで  
しこ生ゆも

咲くまじと思へる花も咲けるかと思ひまじ  
へば枯野はしけし

\*

眼くるめく日は天城峰に入りつつもいま我  
夕食は終らんとする

太陽も天城に沈む頃となりここだ鴉は罅へ  
いそぐ

一匹の犬がしよんぼり春の夜の朧月夜に立  
ちて居けるも

犬よぶちよなにを考へて居るぞもよ春のよ  
い夜の月が霞むに

一匹の黒い小猫がちよこちよこと街をよぎ  
れり春なりおぼる

やすでやすでどこまでゆくぞもぞもその汝  
があゆみに春日はたくも

流れ藻の浮き藻の磯にひとたかり鴉居群れ  
てなにか罵る

\*  
綿谷死す午前十一時政二死すこの電報のお  
ごそかにつく(綿谷四月二十四日卒す、七首)

黒鯛の卵を洗ふと磯にあればとむねをつき  
電報来る

やよ綿谷綿谷と呼べどいまはなし綿谷と呼  
べば涙さしぐむ

星ながる吾等が一つ星流る心もしぬに行方  
をたどる

吾等なにの罪をば荷ひ生れ來しぞかかるう  
きにはあはんと思へや

「ほのぼのと明石の浦の朝なぎに」かくくちす  
さみさめざめとなく

里々に麥は黄ばめどさみごりの山はにほへ  
どいまはすべなし

\*  
軍艦に霧の鐘鳴り曉の吾等が漁師漕ぎかく  
る見ゆ

\*  
やよ淺間淺間よあれな山浦の涼しきお子に  
さやりあらすな(山浦涼子氏を送る一首)

\*  
世の中はそのありのままありのまま青空か  
けり雲よはいゆく

ひとしぐれ向つ岬に立ちよごみ沖邊をさし  
て白帆は走る

102

天きらひ雲のうづまきたちこめて大島が峰  
は時雨ふるらし

今し今三崎のはなにかかるとし見てしが時  
雨沖さかりゆく

\*

沖の巖は潮か干ぬらしぬばたまの暗の底ひ  
に波頭もゆ(夜光蟲を詠す三首)

うちつづく遠淺き瀬の波頭おれて砕けて光  
り戦く

近きはきらら遠きはほのうちになびき夜光  
る蟲の漂ひ流る

\*

たわたわぐみぐみの小枝にゆれつつもはし  
や雀の睦言しげき

\*

秋の夜の曉近き夢の内に君と語ればうれし  
くもあるか(亡友羽木を夢む)

103

はるばると君に手向くと送り來し此花見れば  
涙ぐましも(丸川久俊氏占守島の花二つ贈らる即ち綿谷の靈に供ふ)

104

歌はよめど花とむかへど心ぐしあなたづた  
づし君なしにして

\*

眼ひらけど見ひらけど心果てもなし汝が甘  
九はくれにけらすや(綿谷のかたみを装ふて二首)

うつそみの大路あがゆく一人ゆく君が衣と  
あが二人ゆく(以上大正五年)

幸の待つと云はなくに新玉の年の始はたぬ  
しくもあるか

立ちのぼる海面こめて舞ひのぼる朝の霧は  
も雲となりゆく

\*

言玉のまさきき國と傳へ來す國の乙女よま  
さきくありつげ(妹へ書物を贈りて)

\*

ひとところ海のおも白く打集ひ鷗は今日も  
波に浮べる(沖に觀測に出でて二首)

105

遠の山春かも霞立つなべに鷗とならび今日  
も浮べる

\*

鱈乾しの人集め笛鳴るとふに吾はも今朝は  
君に別るる(馬場驥四郎氏と分る)

\*

神の前もはばかりあらず我犬子さんさんと  
していばりまりをり

雲迷ふ月の夜ながら春ながら沼のかや山に  
はだら雪つむ

かりそめに病めば直ちに死を思ふ心を抱き  
五夜をねぬる

\*

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛かく唱へかく祈  
りつつ君はもいゆく(垂井氏を弔ふ)

\*

波の子は波のまにまに船べりにつかまりに  
つつゆまりおぞする

\*

一匹のさざがしよんぼり外濠の松の小枝に  
今朝もとまれり



なにと云ふ鳥か鳥の名知らねどもついと飛  
び去り行方知らずも

\*

やよ綿谷世は今若葉南より壽<sup>ひよし</sup>は歸り君にぬ  
かづく(弟壽南洋より歸り綿谷の墓を展す)

さんけ百首

父を悼みてよめる

「割引の電車で走る寒さ哉」この句の寒さ忘ら  
ゆべしや

ふともなく父が日記に見出つるあはれこの  
句の忘らゆべしや

父のみの父の枕により添ひてよめりしこの  
句忘らゆべしや

はつとして胸はもせまりあやしくも泣かんとすれば父せき給ふ

110

何事ぞこの涙はぞまがつごとくはなにぞもあはれ弱蟲

日をこめて夜はもこめてよりせまり父が病にまがごとあらせじ

この父をなぞもこの父をなにぞもよわが父のみの父なるものを

何事の逆言おとづれごえか何事のたわこととかも電報來る

船もなし自動車もなし安房の國南の島に我踏む地駄々

凡そ世の不孝は吾に上あらじかくのみからに涙わりなし

局待の電報を待つ冬の夜のくだちくだちて心おびゆる

111

父よまた父よ吾を待て不孝の兒この吾をま  
て一言いはせ

112

我心走れ自動車とく走れ走れよ汽車よ父待  
ち給ふ

一さんに心は走るひたぶるに心は祈る父死  
に給ふな

遅かりし父よ許してよ冷たかる父よ許して  
よああこの吾は(大正六年一月二十一日午前九時五十分父死す)

こいまろび我なく涙なきふせて父と呼ばへ  
ど冷たしこの手

父よ眼をひらき見給へ今一度たつたひとた  
びさんけ申さん

母もなけ弟妹もよ皆なけなくとてなくと  
て父は歸らざるもの

東の間の分れと思ひて分れてし昨日はつひ  
に分れなりける

113

我涙涙の泉傾けてかたむきなけど父冷え給  
ふ

114

臨終のはかなき命おばがするはなしききつ  
つ吾はなきなく

心もちうはへうちむきそりかへり閉せる口  
はにこやけるかも

一日見ぬあひだにかくも細々どちひさくか  
れてねむり給ふよ

ほしがりしを自らむきてふふませし残りの  
おれんぢ乾きたるかも

鐵ぶちのめがねつめたしめがねどもいらぬ  
あの世へ父うせ給ふ

香たきてしきみさしそへ祈ることなにも結  
ばすひたなきになく

泣くな泣くな泣くなと云へど自らのこの涙  
をばいかにすべきぞ

115

あなわびし父がかたみの盃に酒つぎそへて  
めしませと告る

116

ほろほろに酒に酔ひしれて笑みませる父の  
すがたはも悲しき思ひ出

酒のめば酔ひて倒れてそのままにねむるが  
くせとなし給ひけり

晩酌の第一杯の盃をこの世の外のもので  
め  
でしか

酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似ると歌  
ひし旅人思ほゆ

古の歌の聖の酒の歌まことさながらわが父  
のうへ

一合の二合の酒に酔ふやうになりて父はも  
老い老いにける

驚きと悲しみせまりわが妹幼き直枝は熱に  
こやせり

117

大阪の末の弟われよりも早かりしかど父またざりき

118

丈のびてはたちのこの兒上方の言葉あやつれど父知りがたし

南洋の瓜哇に住へるわが弟壽<sup>つよし</sup>はまごひ今はなくらん

丁々と我打つ石の槌の音父の寢棺に今我打つ釘

空晴れて秩父おろしの吹く夕父を焼場に送る日となる

するすると車きしればおんぼらはかまごどざして事なき顔す

第四號故神谷道一郎殿かくはり札のかまごどにかかる

人事になきし涙は今をかもわがことにしもなくべくなりぬ

119

昨日まで人の上とぞながめてし父のなき子  
となれるさびしさ

120

たらちねの母とはさみて我もてる父の白骨  
のいつくしきかも

もろともにこの白甕にはさみいれはさみい  
れつつ涙を流す

つれなしのおんぼがふるふ箕の上の炭に交  
らひ父が骨鳴る

我さかの弱きがからにかくのみし老います  
父を死なせたるかも

残りなく兒等に食はれてむしばめるこの白  
骨と父はなりなる

頭のみ全き形そのままに残りてあるは堪え  
難きかな

骨壺の白布抱き母はゆく陸月は末の三日と  
なりぬ

121

白骨となりて父はもみほとけの壇にしらし  
らすゑられにけり

122

父が友齋藤政徳なきながら父がみたまに酒  
さし給ふ

いやはての南の果のすまらんにまなごひましの  
なく涙はも

検死の醫あぐらかきこみ丈高かに威張りか  
かりてもものいふにくさ

あらあらにしきみかきのけまぶたあけ口を  
ひらきて検死のにくさ

合掌の父が手堅し検死の醫ゆり動かせご合  
掌かたし

ふりかかゝるしきみ抹香手甲脚絆紙にかきた  
る穴錢かなし

女子らがよりより縫ひのかたびらの針目も  
あやなし父着ていませ

123



手甲かけ珠數をもたせて小首より袋たれ垂  
る悲しきろかも

124

この家に父をどごむるいやはての夜のくだ  
ちにつごへる人ごち

通夜僧の經のなごりの細々とただよひにつ  
つ夜ぞあけにける

元日に父がもらひし開運の守はさびし言は  
ん方なし

元日の初卯に父が求めけるまゆ玉ゆらぎ悲  
しめるかも

子等四人父がひつぎをうちかこみちまたき  
しらせひた走りゆく

物の怪の箱馬車と云ふうちものになにぞも  
今日はのりゆくものぞ

街をこえまちをわたりて吾等ゆくちまたの  
人等かかはりもなし

125

妹よ來よ弟よつけ捧げもつこの白箱を佛に  
まつる

据ゑられし佛の前の父が棺しらしら光り輝  
やけるかも

ぬかつきて捻華合掌禮拜すこの兒の心父よ  
あはれめ

呼びかけてほとけの御名を口ぬちにとなへ  
奉ればありがたきかな

あなかしこ父の御靈は久遠劫ほとけの御子  
と今日はなります

大方の人の心のかくはしみ美はしみより我  
命湧く

父のみの父を亡ひし悲しみの底ひよりわく  
有難さはも

霜柱立ちならびたる凍て土のかくろき土を  
ほらせけるかも

つちぬちに父を返して一すくひ涙の土をか  
けて拜む

128

母もかけよ弟もかけよ墓ほりのちいやよか  
けよかろらと埋めよ

さりかはす父に手向の手向酒ほろろと酔へ  
ば父をしをしむ

傾けて我ふふみもつひとつきの酒の味はも  
父よかへりこよ

香はしき酒のかほりのしみしんどしむ夜な  
りけり人らさりゆく

なにここのおよづれ事ぞ氣のふれし叔母は  
残りて父はもいゆく

父のみの父が心をひかれぬる叔母をむかひ  
に父よきませよ

きのふれし叔母には父のなきことも嘆きと  
ならずせんすべもなし

129

十あまり六とせ七とせ病み病みてきのふれ  
しをばはすこやかに老ゆ

130

父まさぬ破家となりうちかつく夜着の重さ  
の身にしむ今宵

家かれて一人しすめば新らしき我悲しみの  
絶えんともせず

かくれたる父か恵みのいや深に我身にかへ  
りねをのみぞなく

七つ八つ星を数へて見たれども星はつきせ  
ず父よねむれよ

水をやれ水はかれつらんかくのりし父が寒  
菊はうべかれにけり

父のみの父がかたみの福壽草それさへ咲か  
ず二月はくれぬ

古ぼけし父が外套のぼけつとをまさぐりに  
つつ涙おちぬれ

131

つめさしのなた豆煙管煙草入れたばこはあ  
たらつまり居けるも

132

いささかの父がさいふに残りたるせに數ふ  
ると吾は泣き居り

すりへりし父がみどめはがまぐちの底の小  
せにとひそみ居けるも

よごれたる父がかたみのえりまきのぬくぬ  
くしもよ顔うづめなく

朝よひの君が手向の手向水鉢のはぼたん  
に春日よあたれ(田宮氏の温情にこたへて二首)

かりそめの草にも恵たれませる君が心のう  
れしくてなかつゆ

數々の君がたびたる歌の數君が心をかけて  
しのばん(齊藤政徳氏弔歌をよせらる)

吾よりも若き友らは皆ゆきて吾のこりきと  
父なきしとふ

133

七の日を七つ重ねてなき父のいやしくしく  
に思ほゆるかも(四十九日忌)

さんけ終り

大正七年  
大正八年

ひげごきの神田橋より常盤橋工女居群れて  
夕歸りゆく

\*

ゆくものはいよいよ遠しこの夜らは仰ぐに  
堪えず淋しき空かな(父一週忌)

\*

手習ふと妻は硯をひきよせて墨すり居れば  
五位さぎなけり(二月冬木町へ居を移す)

\*

十二月朔日初日文樂の越路一座を歌舞伎座  
にきく(竹内と越路をきく即ち長棟へ三首)

このてすりのこの見覚えの小柱に二人はよ  
れど君あらずして

木村屋のばんをかぢりて三階に平土間のは  
げを數へつつ居る(以上大正七年)

\*

父ににていつか少しくうつむきて歩むもく  
せとなりてあるかな(父の三週忌も近づきて二首)

杯を持つ手つきさへ父に似ると人の云へれ  
ばそれもさびしや

天さかるひなの近江の琵琶湖ゆも氷魚届け  
り睦月もなかば(二月山中より氷魚届けり七首)

久方の天の恵みのしたたりのこごりて化<sup>な</sup>れ  
る魚はこの魚

氷魚はも事なく着けり睦みあひかより合ひ  
つつ氷魚はつけり

香はしき青の小籠ゆあふるると氷魚流れて  
かがやきひかる



大き小さき氷魚さらりと皿に満ちさんらん  
として輝きひかる

140

母も見よ妹も見よ妻よほめよこは氷魚そも  
琵琶湖の氷魚

なますかもあつものにもがとりごりに君が  
恵を我頬にうたん

\*

この日頃晝飯ぬきてしかじかのこの歌にし  
も君がかげ深し(田中の歌に應へて十七首)

にちみ出でし君が生活のこの歌の一つ一つ  
に我襟を正す

これほどの歌を詠み出づる生活の君にうれ  
しくねたましきかな

平凡は遂に凡ならず君にしてこの歌にして  
凡ならずけり

そのつ頃四國に住みし暉友の歌おこせしも  
去年のこの月

141

観測に出でて詠めりし暉友の歌もそのとき  
はじめとか云ひし

112

よき歌の一つ二つをとりいでて論ひしがそ  
のままとなりし

歌の友政二は死にて歸らねど今日また君を  
得たるうれしさ

この頃の歌を政二に見せたかりかく思へれ  
ば吾のなき居り

約束の寫真はいかにあらたまの歳たちかへ  
り幾歳まつそ

この頃はうちたまりたる報告に校正にしも  
夜も日もたらず

ひたぶるに観測の数字數ふると乾きたる文  
綴るばかりぞ

顕微鏡も久しく疎く専門の魚卵たまごも見ずて年  
またかへる

143

月給もひとりあがらずそのことの少し心を  
ゆするわびしさ

144

衣に足らず食に足らねばしかすがに三十圓  
はすてられずけり

衣に足らず食に足らねばしかすがに萬葉集  
はすてられなくに

すてられぬあまたをもちて細り身のいよい  
よ細りすてられぬかも

二代目の可樂つるりとはげをなで蛇のはな  
しをきかせたりけり(竹内とある宵を過す四首)

あやつりの政岡泣けばあやしくも吾もなか  
んとすこの心はも

ぎん蝶とよべる盲目の曲弾の後へに鳴れば  
夜はやや更けぬ

今輔の六尺棒はうつけなしたわけばなしに  
吾のこけ居り

145

日に向きて蛙一匹しみじみと朝の田甫にか  
しこまり居り

\*

口あけて犬ながながと寝倒れしここの小路  
に秋風わたる

\*

向き向きに粟の垂り穂の垂り足らひ天津日  
底に息づきなびく(腰越に布目を訪ふ)

\*

朝露にぬれ傾ける芋の葉の白ら白ら光りか  
がやけるかも

さよならと言ひ交はしたる言の葉も昨日の  
ことぞゆうべのことぞ(竹下の遊きは十一月二十五日  
本週航出帆の日なりし即ち十四首)

大きな君が手握り言ひ難き分れを胸に告  
げて來しかな

大きな友が手さすり言ふことの情もなか  
りし昨日をくやむ

嘆きつつ潮の五百路を押し渡りえぞの港に  
なく神谷はも

船に居て竹下思ひなき居れば港は雨のいよ  
いよしげし

148

えぞにきて佛の御名に竹下を呼びかけんと  
は誰か思ふべき

つぶらなす苦しき眼おしひらき友の呼ばひ  
し我名を思ふ

大きな坊やと言ひしざれごとに笑みてく  
れしも分れとなりぬ

はすかひに枕をいだきあえぎつつ吸入にし  
も僅かにね入りぬ

うとうととぬるかと思へばつちりと眼お  
しひらきあえぎにあえぐ

何すさてこの苦しみに會へるやと友の叫び  
しあまりに悲し

生きんより死ぬるまさると悶へりし君の苦  
しみをたれにのろはん

149

安からぬ幾夜潮路の波枕現に夢になきつゝ  
渡る

浪枕まねく重ねて日の本の島とふ島をなき  
つつ渡る

\*  
この地球の墜つと夢みて眼醒めたる身は函  
館の船にゆれ居り(函館港)

\*  
金山の吹雪が下に咲きいでしなでしこあは  
れ咲きつつしぼむ(佐渡相川)

大正九年以後

吹きしわむ水田の中のかり株のつばらに並  
び冬の日くるる

\*

今過ぐる尾張一ノ宮このわたりからし菜の  
花盛りを過ぎたり(車窓所見)

\*

惶しく鈴木と分れかへり見る伊勢のわたり  
は朝雲ひくし(名古屋驛に鈴木と遇ふ、忽ち分る三首)

やさばかり肩をたたきて相見たる鈴木は鈴  
木少しくやせたり

十年ほども會はずかあらんお互に歳をとり  
たるさびしさ残る

\*

洲の崎にふりかかりたる雨雲の騰つかと見  
れば巻きつつ流る(安房館山にて)

\*

あなにやしえをどめと呼びうちかはすその  
たたむきゆまことは流る(勝見の新婚を祝ふ、二首)

あなにやしえをどこと呼びうちむすぶその  
くちつけゆ愛はもあふる

新らしき木の芽ふきそろひかがやける鹿島  
の森に松蟲なくも(伊豫北條、鹿島二首)

いでて見る鹿島の山の中ほごに霞たなびき  
風わたる見ゆ

\*

待ちて居し松茸つきぬ難波潟短かき秋の日  
くれにつきぬ(田中より松茸来る八首)

待ちて居し松茸つきぬ香はしき香りたもち  
て四日目につきぬ



まちゆたけとからくまねして坐りたる尙一  
の前に青籠ひらく

156

會式はよ祖師にあげんととりいだす松茸は  
母の手にあまりたり

ひなびたる土瓶むしとふ松茸の走りを食ひ  
し油やを思ふ

この吾よなにをなくそも茸狩りに父と遊び  
し山な思ひそ

松茸の生ゆとふ山の山すそに君うつりすみ  
て茸狩るらんか

川音を間遠にききてねむりたるかの大きな家  
に日射しよ満ち満ちて

昨夜の風に吹き乾きたる凍て土のふむに堪  
えざる大地のひびき

旭光照波十首

ほのぼのと空明りして出づる日の出づるに  
間なき大海の上

157

大海のはての大空一面にかがよひ渡りかが  
よひまさる

158

出づる日のまさに出でんとたゆたへる光り  
は海のおもてを被へり

いでますと拜む海に光りさし波にたゆたひ  
天津日のぼる

さし昇る日の光りはもさし昇る日の赤さは  
も海原に満つ

ゆらゆらと浮び出でたる大き陽の光りはあ  
まねく波の穂をてらす

さし昇る日の大いさよ大海の波のはたてに  
さへぎるものなし

海と空と相合ふはての一筋を日ははなれた  
りのぼりに昇る

遠き世の遠の神代のはじめより變らぬ光り  
拜みまつる

159

ひたぶるに拜みまつる昇る日の光りあびつ  
つぬかづきふすも

\*

降りしきる吹雪の能登の海に出でてたら卵  
しぼると船もやひ居り(たらの卵をしぼる十五首)

降りしきる吹雪の能登の海に出でてたら卵  
しぼると綱まちするも

えり巻に顔を埋めてかがまれど能登の吹雪  
はいたくもいたし

船子らはむしろのかこひ取り廻し火ごこい  
だきてかがまりふせり

船子らはむしろがこひにかがまりて吹雪の  
宵も綱あぐるとふ

一しきり雪は切れたれど吹きつくる山越の  
風はいたも身にしむ

起きいでし船子は一人のぞきしてたらの入  
りをばうかがひすませり

能登の海七見の磯に三重五重網おり建てて  
たらを漁すも

162

角網とよべる敷網夜もひるもたらを待ちつ  
つまちくらすがね

水面近く浮き上り来るたら突くと船子の一  
人やすとりさわぐ

入りたるたらは居むれて網ぬちを廻はりて  
およげり小さくし見ゆ

たらのうめるたら卵掬ふと絹袋もて網間漕  
ぎたみ上曳きするも

十あまり五つ六つは入りしと船子は網口へ  
繩傳ひつつ

網口より網をたぐりて寄りくれば網はせば  
まりてたらおよぐ見ゆ

やうやうに網せばまれど網ぬちのたらはお  
となしく居むれてさわがす

163

### 書後に

巻頭になされた綿谷政二の歌は綿谷が残して行つた歌の殆ど全部である、その一つ一つは私をかういふ方面で導いてくれた悲しい紀念である、これを知りいれることは私にとつて、また極めて自然な心持である。

寺田先生には忙しい御研究の間から、心をこめた序文を書いて頂いて著者の光榮はこれに過ぎぬ、表紙畫は、親友、勝見の忠實なスケッチである、感謝に堪えぬ。

印刷についていろいろ配慮を煩はした濱野英太郎氏にも厚く御禮を申上げて置く。(大正十二年八月)

書後追記——昨夏校正中震災に遭ひ、中絶したのであるが、幸にして焼けなかつたので、そのままこれを出すことにした。(大正十三年六月二十五日)

大正十三年七月十二日印刷  
大正十三年七月十五日發行

定價金壹圓五拾錢

著作兼發行者 神谷尙志

印刷者 東京市麩町區紀尾井町三番地 福王俊禎

印刷所 東京市麩町區紀尾井町三番地 東京印刷株式會社 麩町出張所

529  
41

終